

# スポーツ部活動(2)

新野 守 (Shinno Mamoru)



# 教師とコーチの行為の本質的な相違点

## 教師

### ①事実を教える

バスケットボールはネイスミスによって考案された(事実)

### ②規範を教える

試合ではルールを守る(規範)

### ③仕方を教える

シュートは手首のスナップでボールを回転させる(仕方)

### ④技能の卓越を目指して練習する

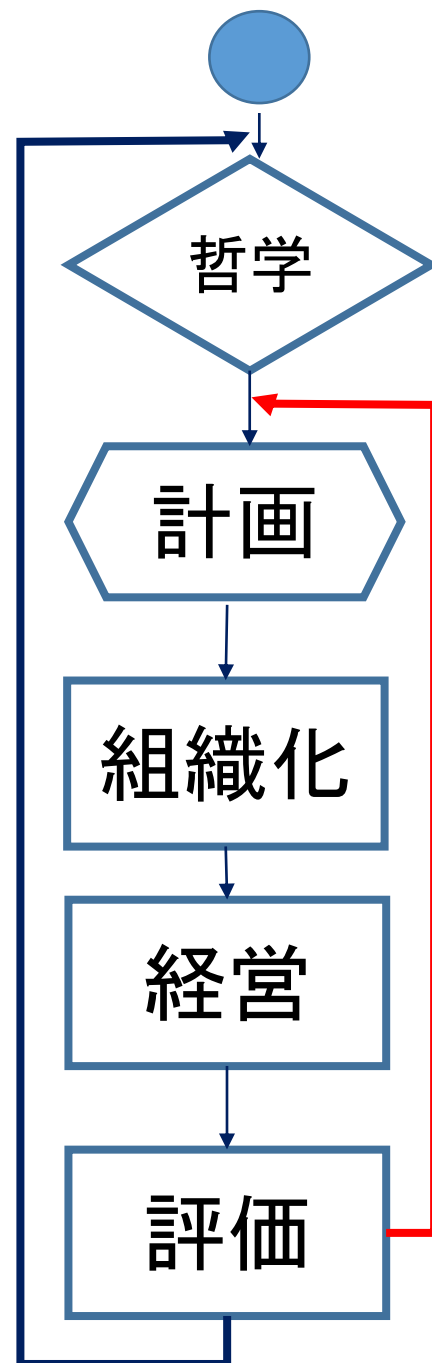
### ⑤目標へ向かうようにリードする

## コーチ



# コーチング回路

コーチングという一連の行為(コーチング実践)は、哲学から始まるプロセスが連続する回路として考えることができる。哲学の段階はその実践の意図(価値)を考え、コーチング実践がフィードバックするところである。しかし、コーチング回路が、計画ヘシヨーとすることによって勝利追求へと暴走し、過熱が生じる。



部活動は教育プログラムにコーチング回路を組み込んだもの

子供たちの成長は善いものである

勝利することは善いことである

甲子園出場を目指す

チームの編成(切磋琢磨)

使える・使えない選手、選手の手段化

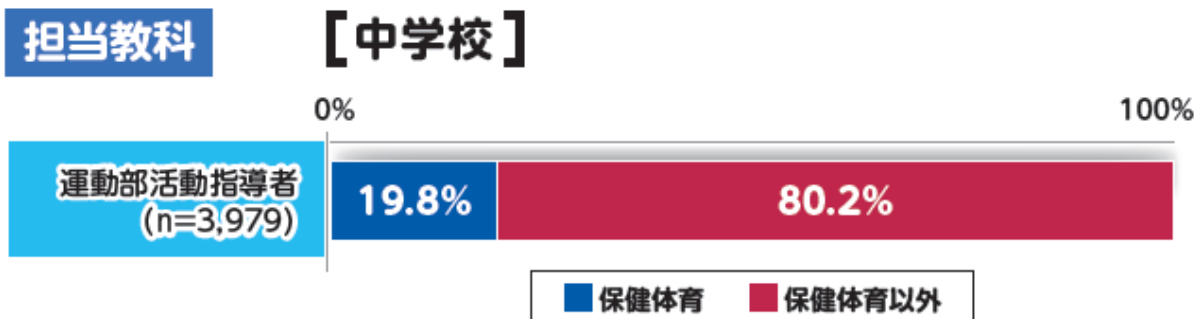
練習・試合・地方大会参加

一回戦敗退 or 準優勝、ベスト4

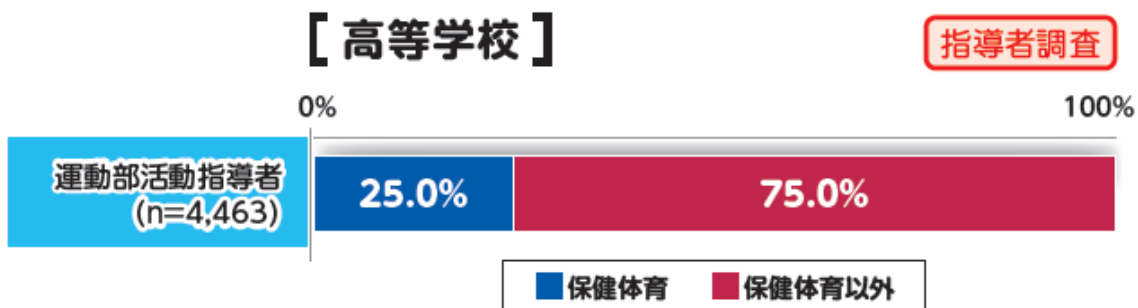
どのルートを選択しますか？



# 部活動の顧問＝学校教員＝教育（人間形成）



※教員全体の比率では、保健体育の教員は 10.8%（複数回答を含む）を占める。



※教員全体の比率では、保健体育の教員は 10.5%（複数回答を含む）を占める。

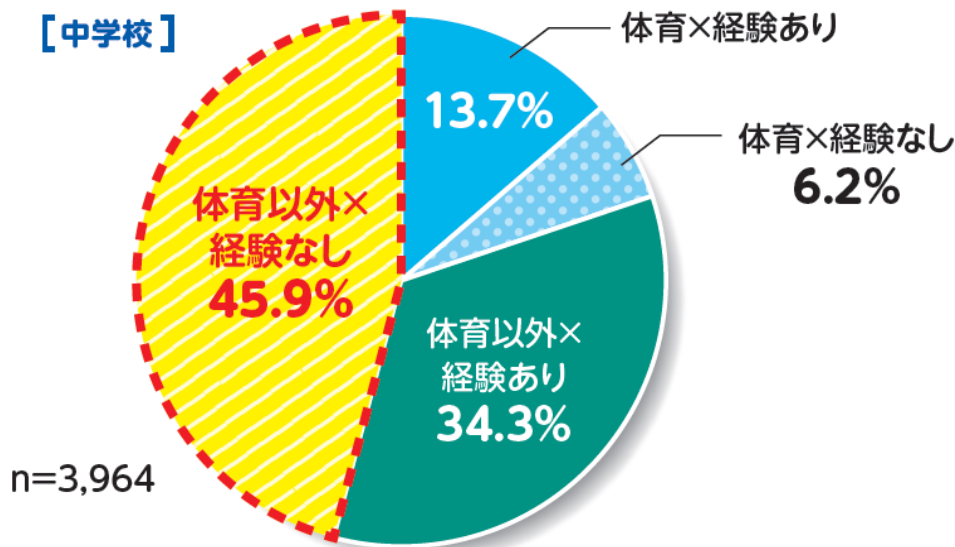
※文部科学省 平成 22 年度学校教員統計調査



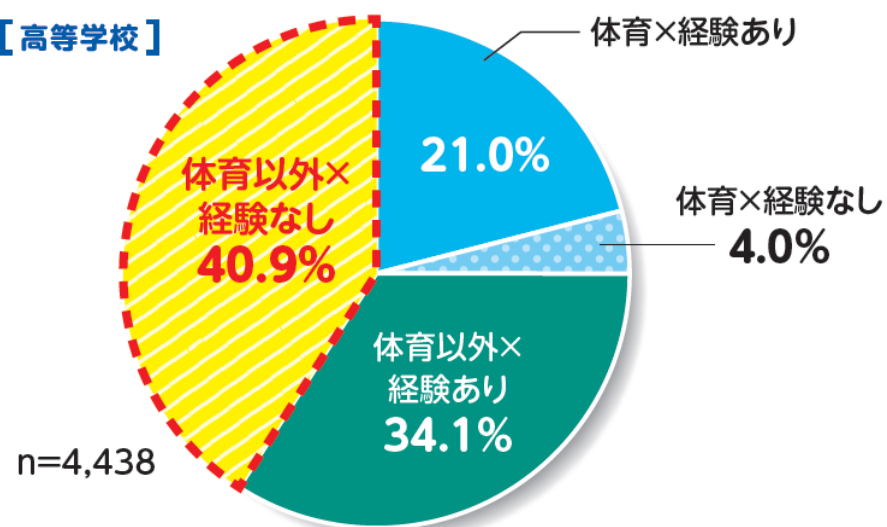
# 部活動の顧問の専門性＝担当競技スポーツの経験者 約50%強、50%弱が未経験者

- **体育×経験あり**:「担当教科が保健体育」かつ「現在担当している部活動の競技経験あり」
- **体育×経験なし**:「担当教科が保健体育」かつ「現在担当している部活動の競技経験なし」
- **体育以外×経験あり**:「担当教科が保健体育でない」かつ「現在担当している部活動の競技経験あり」
- **体育以外×経験なし**:「担当教科が保健体育でない」かつ「現在担当している部活動の競技経験なし」

【中学校】



【高等学校】



# 自覚問題：1校務多忙、2専門的指導力の不足、3部員数

図2 <担当教科×現在担当している競技の過去経験の有無>と<指導において最も問題・課題であると感じている項目>との関連

## 【中学校】

	全体 (n=3,833)	体育×経験あり (n=520)	体育×経験なし (n=237)	体育以外×経験あり (n=1,302)	体育以外×経験なし (n=1,728)
第1位	校務が忙しくて思うように指導できない(32.3%)	校務が忙しくて思うように指導できない(36.7%)	校務が忙しくて思うように指導できない(29.1%)	校務が忙しくて思うように指導できない(40.2%)	自分自身の専門的指導力の不足(39.5%)
第2位	自分自身の専門的指導力の不足(26.7%)	施設・設備等の不足(18.5%)	自分自身の専門的指導力の不足(27.8%)	自分自身の専門的指導力の不足(16.3%)	校務が忙しくて思うように指導できない(25.6%)
第3位	自分の研究や自由な時間の妨げになっている(13.6%)	部員数が少ない(17.5%)	部員数が少ない(13.5%)	自分の研究や自由な時間の妨げになっている(14.8%)	自分の研究や自由な時間の妨げになっている(14.9%)

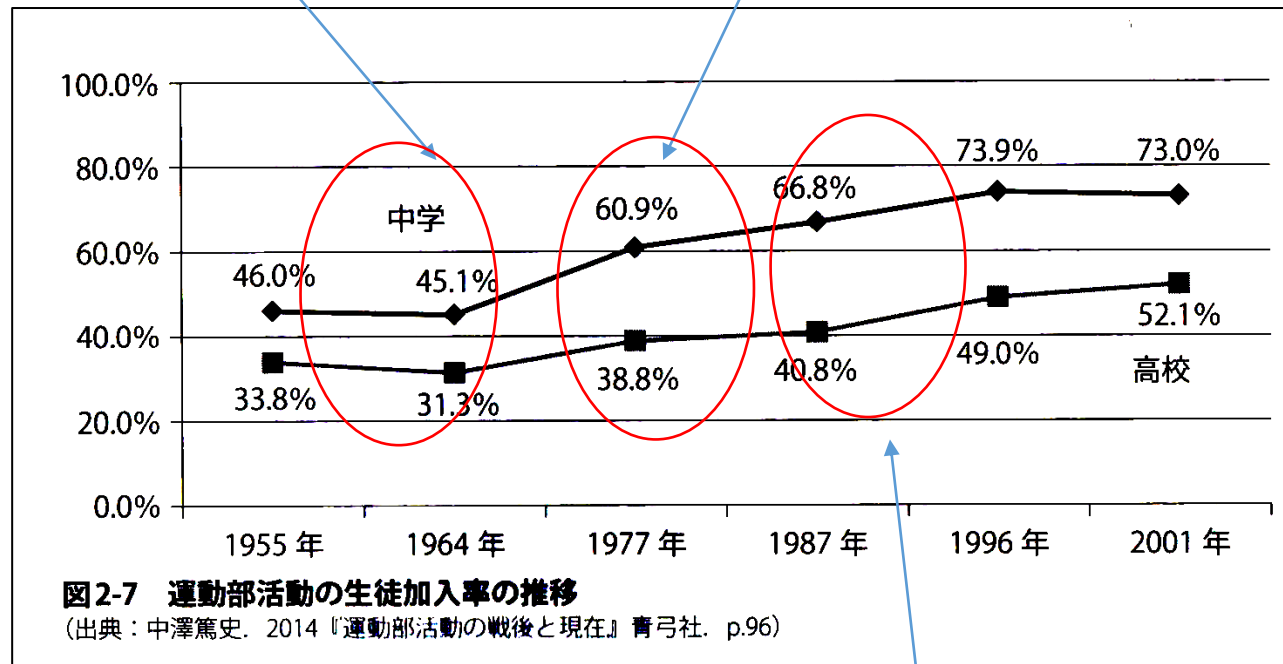
## 【高等学校】

	全体 (n=4,229)	体育×経験あり (n=879)	体育×経験なし (n=164)	体育以外×経験あり (n=1,440)	体育以外×経験なし (n=1,699)
第1位	校務が忙しくて思うように指導できない(28.8%)	部員数が少ない(28.8%)	自分自身の専門的指導力の不足(27.4%)	校務が忙しくて思うように指導できない(37.1%)	自分自身の専門的指導力の不足(38.3%)
第2位	自分自身の専門的指導力の不足(24.3%)	校務が忙しくて思うように指導できない(23.9%)	校務が忙しくて思うように指導できない(21.3%)	部員数が少ない(17.6%)	校務が忙しくて思うように指導できない(24.8%)
第3位	部員数が少ない(16.4%)	施設・設備等の不足(21.4%)	施設・設備等の不足(18.9%)	自分自身の専門的指導力の不足(16.5%)	自分の研究や自由な時間の妨げになっている(10.9%)

# 運動部活動の生徒加入率の推移

東京オリンピックに巻き込まれながらも、青少年のスポーツ活動も競技力向上が求められ、運動部活動の在り方も一部のエリート選手を中心とするように変化した。

1970年代にはスポーツの大衆化が目指され、多くの生徒に平等にスポーツ機会を与えるように、運動部活動は平等主義的に拡張していった。



1980年代は、学校の荒れや非行生徒の校内暴力といった問題があった。そこで運動部活動は非行防止や生徒の指導の手段として利用され、管理主義的な側面からさらに拡張して至った。





表2-5 運動部活動に加入する生徒の入部理由と悩み

入部理由	中学校	高校
そのスポーツを楽しみたかったから	46.6%	46.9%
そのスポーツを上手くなりたかったから	39.2%	33.4%
体を鍛えたかったから	17.9%	13.0%
選手として活躍したかったから	15.1%	21.2%
仕方なく	9.0%	3.3%
悩み	中学校	高校
休日が少なすぎる	20.9%	22.6%
疲れがたまる	19.0%	22.5%
遊んだり勉強したりする時間がない	18.2%	21.5%
思うほどうまくならない	18.0%	20.9%
特別の悩みはない	23.7%	19.6%

### 【部活動手当】

週休日などに行われる部活指導への特殊業務手当は、4時間以上の部活動指導に対して3,000円、対外運動競技等の引率指導業務に対して4,250円が支払われる。

運動部活動の指導や管理を担う教師の多くが顧問教師として運動部活動に従事する一方でその保障体制は十分ではない。

表2-6 運動部活動の顧問教師の指導目標と悩み

指導目標	中学校	高校
協調性や社会性を身につけさせる	51.1%	46.0%
精神力や責任感を育てる	36.3%	35.3%
将来にわたってスポーツに親しむ態度を育てる	31.0%	23.9%
競技力を向上し大会で少しでも良い成績をおさめる	26.5%	40.5%
体を鍛え将来活力ある生活ができるようにする	20.1%	14.2%
悩み	中学校	高校
校務が忙しくて思うように指導できない	51.2%	48.9%
自分の専門的指導力の不足	42.9%	39.7%
自分の研究や自由な時間等の妨げになっている	22.3%	17.4%
施設・設備等の不足	19.7%	22.6%
特にない	2.5%	3.6%





# スポーツ活動中の死亡事故

種目別で見ると、柔道での死亡事故が多く、29年(1983年度～2011年度)で118名の生徒がなくなった。死亡事故は、中学1年生や高校1年生など初心者によく、投げ技による頭部外傷が死因となる傾向がある。

## 文部省の「運動部活動のガイドライン」

禁止されるべき体罰の具体例として、「殴る・蹴る」「無意味な正座」「水を飲ませず長時間ランニング」「パワーハラスメント」「セクシャルハラスメント」「人格否定的な発言」など

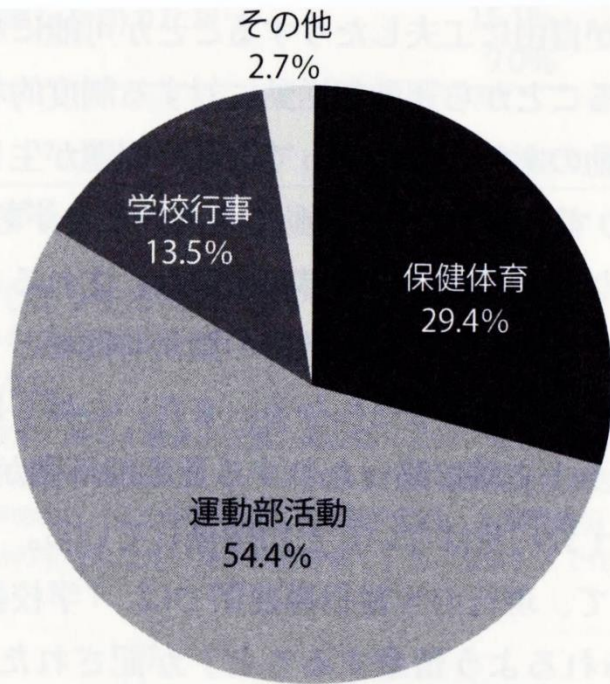


図2-8 学校管理下におけるスポーツ活動中における死亡事故364件の内訳 (2001－2010年度)

(出典：内田、2013. p.25.)

## 顧問の過労実態

2013年OECDの『国際教員指導環境調査』によると、中学教師が課外活動(スポーツ/文化)に費やす週当たりの時間は、平均2.1時間に対して日本は7.7時間であり、教師を多忙化させる原因となっている。



## 参考文献

友添秀則、岡出美則編『新版教養としての体育原理』大修館書店2016年

文部科学省『学校教員統計調査』平成22年度

日本スポーツ協会『学校運動部部活動指導者の実体に関する調査報告書』2014年

